

おうしゅうあだちがはら

奥州安達原

〔解説〕

宝暦十二（一七六二）年九月、竹本座で初演。奥州の伝説「善知鳥うとう」や「黒塚」を取り入れ、近松半二、竹田和泉、竹本三郎兵衛らが書いた時代物。八幡太郎義家の奥州攻め（前九年の役）で滅ぼされた安倍頼時の遺子、貞任（さだとう）、宗任（むねとう）兄弟が復讐をはかる苦心を描いている。もとの形は五段物であるが、五段目が上演されたのは、初演時と翌年正月だけである。眼目は三段目「環の宮明御殿（たまきのみやあきごてん）」で、特に、盲目の袖萩が歌にのせて両親に不孝を詫げる場面は「袖萩祭文（そではぎさいもん）」と呼ばれ、有名。

〔三段目あらすじ〕

廉仗直方（けんじょうぢょうな）のおかたの娘袖萩は、父に背いて浪人と不義をしたため勘当され、前九年の役の後、夫に離れ流浪の末に盲目となり、娘お君と朱雀堤で乞食になっている。通りかかった廉仗は、偶然それが勘当した娘だと知る。袖萩の方も、廉仗の家の言葉から父が今迄ここに居て、皇弟の環の宮の行方が知れないという難儀に会っていることを知り、娘を伴い環の宮の御殿へと向う。

廉仗は環の宮を守護する立場だが、宮が誘拐されてしまい、行方を探している。義家に嫁している袖萩の妹の敷妙は、夫の使者として御殿へやって来て、宮の行方が知れない時は義家の役目として敵味方となる旨を伝える。

そこへ思いがけなくも義家が現れたので、倭仗は全て安倍一味の仕業ではないかと考えを述べる。義家も、瑞祥の鶴を殺した咎で捉えられていた南兵衛を引き出し、安倍宗任であろうと問いたですが白状しない。

折から倭仗の見舞に來た桂中納言則氏（実は安倍貞任）と南兵衛（宗任）は、それとなく兄弟の再会をし、源氏調伏を約する。

雪の降りしきる中、御殿にたどり着いた袖萩は、祭文に託して不孝をわび、娘お君に会ってほしいと願う。袖萩の夫が貞任であることを知った倭仗は、敵方の妻となった娘とはなおさら会われぬと、雪の中に母娘を置き、家に入る。

倭仗は環の宮を敵に奪われた責めを負って切腹。袖萩も宗任から、敵の源氏方である父を討てと渡された懐剣で自害する。則氏は実は貞任がなりすましていたことを義家に見破られ、謀も失敗に終ったと悔やむ。義家は兄弟に、勝負は戦場でと約し別れる。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

環の宮明御殿の段

立つて入りにける

たださへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す

白梅も無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の縁

不憫やお袖はとぼ／＼と親の大事と聞くつらさ、娘お

君に手を引かれ親は子を杖子は親を、走らんとすれど、

雪道に力なく／＼辿り来て、垣の外そと面に、

「ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」

「イ、エ門口に侍衆が、居睡つてゐやしやつた間に」

「フ、賢い子ぢや、僂仗様はこの春から主のお屋敷に

はゞござらず、この宮様の御所にと聞いて、どうやらか

うやらこゝまで来ごとは来たけれど、ご勘当の父上母

上様、殊に浅ましいこの形で、誰が取り次いでくれる

者もあるまい、お目にかゝつてご難儀のやうすがどう

ぞ聞きたや」

と、探れば触る小柴垣

「ム、こゝはお庭先の枝折門、戸を叩くにも叩かれぬ

不孝の報い、この垣一重が鉄くろがねの」

門より高う心から、泣く声さへも憚りて簀戸すどに、喰ひ

付き泣きゐたり。僂仗はかくとも知らず

「垣の外面に誰やら人声、アレ女どもはをらぬか」

と、云ひつゝ自身庭の面

外にはそれと懐かしさ、恥ずかしさもまた先立つて、

掩ふ袖萩、知らぬ父、明けてびつくり戸をびっしやり

「なんのご用」

と腰元ども、浜夕も庭に立ち出でゝ

「僂仗殿なんぞいの」

「イヤなんでもない、見苦しいやつがうせをつて、腰

元ども追ひ出せ、婆、あんなもの見るものでない、こ

つちへお来やれ〜」

と夫の詞は気も付かず

「なにをきよと〜云はっしやる、犬でも這入りまし
たか」

と、なに心なく戸を開けて、よく〜すかせば娘の袖
萩、はつと呆れてまたばったり、娘は声を聞き知れど
『母様か』とも得も云はず、母は変りし形を見て胸一
杯に塞がる思ひ、押し下げ〜

「定めない世といひながらテモさても〜〜思ひ
がけもない」

「コレ〜婆なに云やる」

「イヤさあやつぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め、
親に背いた天罰で目もつぶれたな、神仏にも見離され、
定めて世に落ち果て〜をらうとは思ふたれど、これは
またあんまりきつい落ち果てやう、今思ひ知りをった

か」

と、よそに知らずも涙声、やうす知らねば腰元ども

「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、
お庭先へむさくるしい、とつとと出や」

とせり立てられ

「ハイ〜ハアイどうぞこ了簡なされてまちつとの
間」

「ハテしつこい」

と女中の口々

「ヤレ待つてくれ女子ども、ヤイ物貰ひ、お銭あしが欲し
くばなぜ歌を歌はぬぞ、願ひの筋もなんなりと、歌う
て聞かせ」

と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ

「あい」

とは云へど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引

きかへて、露命をつなぐ古^{ふる}絃^{いと}に、皮も破れし三味線の

へばちも慮外も顧みずお願ひ申し奉る。

今の、憂き身の、恥づかしさ、

父上や母様のお気に背きし報ひにて、

二世の夫^{つま}にも、引別れ、

泣きつぶしたる、目なし鳥、

二人が中のコレ、このお君とて、

明けてやうく十一の、

子を持つて知る、親の恩、

知らぬ祖父様祖母様を、

慕ふこの子がいぢらしさ、

不憫と思し、給はれ

とあと歌ひさし、せき入る娘、

孫と聞くより濱ゆふが、飛び立つばかり戸の透間、
抱き入れたさ縊りたさ。祖父^{じい}も変はらぬ逢ひたさを、

隠してわざと矢り声。

「ヤアかましい小歌聞きたふない。女ども、奥へい
て、お客人に付いてるよ。サ、皆行け行け。コレサ婆

何うぢうぢ。早く畜生めを、叩き出してしまやれさ」

「ア、コレ、腹立ちは尤もなれど、それはあんまり」

「ハテさて、隙入るゝほど為にならぬ。武士の家で不

義^{めろ}した女郎^{めろ}め、叩き出すとはまだ親の慈悲。長居せば

ぶち放さうか。親の恥を思ふて、名を包むはまだしも

と思ひの外、今となつて身の置き所がなきの詫言。

恥面も構はずよつくうせたな。但しは親へ^お頬^ほ当てに、

わざとその形^{なり}見せにうせたか、憎いやつ」

と怒りの声。袖萩悲しさやる方なく、

「なんなんの誓文、勿体ない。さりながら、そふ思し召すも御尤も。大恩を忘れた徒。いたずら我が身ながら愛想のつきたこの体。お詫び申したとてお聞き入れが何のある。そりやもふ、思ひ切つてはおります。お屋敷の軒までも、来られる身ではなけれども、お命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顔押ぬぐふて参りました。不孝の罰で目は潰れる。この子を連れて、この軒では追ひ立られ、かしこの橋では打ち叩かるゝ憂き目に逢ふても、この身の罪に比ぶれば、まだ、まだまだ業の果たし様が足らぬ、と未来が猶しも恐ろしい。この上のお願ひには、娘のお君お目見へ、と申すは慮外。只の非人の子と思し召し、たった一言お詞を、おかけなされて下され」

と、喚けばお君も手を合はせ、

「申し、旦那様、奥様。外に願ひはござりませぬ。お慈悲に一言物おつしやつて下さりませ」

と云ひ馴れし、袖乞ひ詞に濱ゆふが、

「エ、可愛や可愛やな。子心にさへ身を恥ぢて、祖父様ともばゞ様とも得云はぬ様にしおつたは、皆おのが徒故。畜生の様な腹から、見事犬猫も産みおらず、生まれ落つると乞食さす子を、アレあの様におとなしう、産みつけさまは何事ぞ。余り憎ふておりや物が云はれぬ云はれぬ」

とむごふ云ふのは可愛さの、裏の濱ゆふ

「幾重にもお慈悲お慈悲」

と泣くばかり。儻仗猶も声荒らか。

「ヤア親が難義に逢はふが逢ふまいが、女めがいらざる世話。同じ兄弟でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と

呼ばるゝ手柄。姉めは下郎を夫に持てば、根性までが
下主女めげす」

と、恥ぢしめられて

「わっ」

と泣き、

「下主下郎とはお情ない。夫も元は筋目ある侍。黒沢

左中とは浪人の仮の名。別れた時の夫の文に、筋目も

本名も書いてござんす。これ見てたべ」

と差し出すを、取り次ぐ紙のはしくれも『詫びの種に

もなれかし』と、思ふは母より直方が読む文体の奥の

名に、『奥州安倍貞任、とは南無三宝。さては貞任と縁

組みしか』と、心もそぞろに懐中の、一通取り出し引

きはせば、『さてこそ同筆。ハアはっ』とばかり当惑

の、色目を見せじとずんと立ち、

「ヤア穢けがらしいこの状。いよいよ以て逢ふ事ならぬ。
サア奥こちへ。ハテぐづ付かずと早おじゃれ」

と尖すゑい詞にせがまれて、母もぜひなく立つて行く。

「なふコレ暫し。もふ逢はふとは申しませぬ。お身の
難義のその訳を、どふぞ聞かして下さりませ。申し申
し」

と延び上がり、見れど盲の垣覗き。早暮過ぐる風につ
れ、折しきから頻りに降る雪に、身は濡れ鷺のあし垣や。

中を隔つる白妙も、

「天道様のお憎しみ、請けしこの身は厭はねど、様子
聞かねば何ぼでも、いなぬいなぬ」と泣く声も、嵐と
雪にうづもれて、『聞こへぬ父』と恨み泣き。次第次第

に降り積もる、寒ひたえ気に肌も冷え切れば、持病の癩の
差し込んで、かつぱと転べばお君はうろろう、さする

背中も釘氷。涙片手に我が着る物、一重を脱いで母親に、着せてしよんぼり白雪を、すくふて口に含ますれば、やうやうに顔を上げ、

「ア、お君、もふよござる、もふよござる。この又冷える事はいの。そなたは寒ふはないかや」

「イエイエ。私は温かふござります」

「よふ着てゐやるか、ドレドレ。ヤア、そなたはこりや裸身はだかみ。着る物はどふしやった」

「アイ、余りお前が寒からふと思ふて」

「へッエ親なればこそ子なればこそ。わしが様な不孝な者が何として、そなたの様な孝行な子を持った。これも因果うちの中か」

とて、抱きしめ抱きしめ泣く涙。絶え兼ねて垣越しにうちかけ襦うしかけひらりと濱ゆふが、

「さつきにから皆聞いてゐる。まゝならぬ世じやな。

町人の身の上ならば若い者じやもの、徒もせいじや。

そんなよい孫産んだ娘、ヤレ出かしたと呼び入れて、

聳よ舅と云ふべきに、抱きたふてならぬ初孫の、顔も

ろくに得見ぬは、武士に連れ添ふ浅ましさと、諦めて

逝んでくれ。ヨ、ヨ」

と云ふ中に、

「奥、濱ゆふ」

と呼ぶ声に、

「アイ、そこへ参ります。娘よ孫よ、もふさらば。可

愛の者や」

と老ひの足、見返り見返り奥へ行く。

折しも庭の飛石伝ひ、雪明りに窺ひ寄る、安倍宗任
戸を引明くれば

「ア、こわ」

と、立退くお君をちつと捕へ

「コリヤ怖いことはない、そちが叔父の宗任ぢや」

「ヤア宗任様とは夫貞任殿の弟御」

「ヲ、つひに逢はねど、あによめ 嫂の袖萩殿」

「ヲ、そんならお前に問ふたら知れるであろ、夫婦別
れるその時に夫に預けた清童きよどうは息災であるかいな」

「ウムその清童はの、傷寒で死んだわいの」

「エ、イ、ハア」

「ヲ、歎きは理、なにかにつけて一家の敵は八幡太郎、
こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵なにとぞ近寄つて、

直方が首討たれよ」

「エ、イあのと、様を」

「ム生けおいてはわれ／＼が大望の妨げ、コレこの懐

劍で」

と手に渡す、難題なんと障子のうち

「曲者待て」

と大将の、声にびっくり

「折悪し、そちへ／＼」

と忍ばせて、胸をすゑてどつかと坐し

「縄引切つて逃げ出でんと存ぜしに、見付けられたは

運の極め」

と、腕押廻せば、義家公、縄にはあらで真紅の糸、結

びし金札宗任が首にさつくと打ちかけ給ひ

「網に洩れたる鱗うろこずを助くるは天の道『康平五年、源

義家これを放つ』と書き記せば、この上もなき関所の

切手、日本國中放し飼ひ」

と、仁者の詞に

「ハ、ア」

はつと、雪に頭は下げながら、底の善悪閉ぢ隠す氷を踏んで別れ行く。夫の最期を浜夕が、白梅の腹切刀、三方に乗る露涙、外にも同じ袖萩が、死ぬよりほかは、なくくも、帰る戸口に、父兼仗繫金しつかと座に直り、三方取つて覚悟の矢の根、取るとは知らぬ袖萩が娘に見せじと突込む懐劍、『はつ』と驚き取り付くお君、声立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ

「まだ女めは去にをらぬか、氣強くは云ふものの年寄つたれば、なんどき知れぬ、声なりともよく聞いてお

け」

と、それとは云はぬ、暇乞ひ、とは露程も袖萩が

「さてはお心和らぎしか、かうなり果てた身の上、どうで追付けのたれ死に、これがお声の聞き納めで、ござりませう」

と親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押明け立寄る則氏、母はかけおり

「ヤアそなたは自害しやつたか、コレ兼仗殿もご切腹」
「エ、あのとく様も」

「娘も」

と一度に驚き転び降り、呆れ涙に別ちなし、手負ひを
見届け中納言

「貞任に縁組まれしご辺、所詮死なで叶はぬ命、袖萩とやらんも死なずばなるまい、健気なる最期のやうす天聴に達し、申すべし」

と、冠氣高くしづくと心、残して立出づる、衣紋に薫る、風ならで、怪しや聞ゆる鐘の声、『コハいぶかし』と立戻り、辺りに心目を配る、一二の対の屋隅々に、太鼓の音のかまびすし

「ハテ不思議や、この明御殿に陣鐘を打立つるは、なに者なるぞ」

と振り返る、一間のうちより高らかに

「八幡太郎義家これにあり、奥州の夷えびす安倍貞任に見参せん」

と、立出で給ふ御大将、続いてかけ寄る二人の組子、弓手馬手にはつたと蹴飛ばし

「ヤアラ心得ず桂中納言則氏を、貞任とはなにを以つて」

「ホ、ウこの義家、天眼てんげんつう通は得ざれども、過ぎつる大

赦の砌、桂中納言なりと名乗り来る曲者、つくく面体を窺ふに、われ幼き時見覚えし安倍頼時にさも似たり、さてこそ貞任に極まつたり、宮の御行方、十握とつかの宝剣をも取り隠し、なほ二種の御宝を奪ひ、親が根ざしの大望を達せんとの巧み、抗はれぬ証拠はこれ」と、白旗を取り出し給ひ

「最前汝が弟宗任と、別れてほど経し兄弟の対面、梅の花によそへてかけたる謎、はやくも悟つてこの歌、『わが国の梅の花とは見つれども』と連ねし上の句、梅の花は花の兄、わが国とはわが本国、奥州の兄ならんと、兄弟一致の血判に白旗を汚し、源氏を調伏、この上にも返答あるや、サ、ハ、ハ、なんとく」と差し付けられ、貞任無念の髪逆立て

「チエ、口惜しやな、われ一旦浪人となつて、都のや

うすを窺ひしが、官位なくては大内へ入り込まれずと、
流人赦免の折を幸ひ、島にて死せし則氏といつはり初
めて逢ふた舅廉仗に腹切らせしも一つの手だて、所詮
わが謀空しくなれば、親の敵八幡太郎、運を一時に決
せん」

と、太刀に手をかけ詰め寄れば

「ハ、ア急いたりな貞任、汝獅子王の勢ひあるとも八
方に敵を受け、遁るべきや、またその方が一命は、宮
宝剣の御ありか白状する迄助けおく、命存へ時節を待
つて父頼時が弔ひ軍は又重ねて、弓矢の情は相互ひ、
夫婦の操も節義は一つ、貞心厚き袖萩が、最期の際に
暇乞ひ」

と情の言葉に、袖萩が

「なう懐かしの貞任殿、最前からよう似た声とは聞き

ながら、六年ぶりで廻り逢ひ、顔見ることも得叶はぬ
か、死ぬる今際にどうぞしてこの目が開きたいコレお
君」

「とく様なう」

と稚な子を、見るにさすがの貞任も、共に血をばく
親々が、恩愛の涙はら〜〜、御大将も直垂ひたたれの袖射
削つてあまりの矢先、竹にたちまちすつくと宗任

「最前見遁し帰りしは、兄弟本意を遂げんため優曇華
まさりの親の敵、サ、勝負々々」

と詰めかくるを、貞任『暫し』と押しとぐめ

「晋の予讓は衣を裂くきぬ、この白旗をまつこのごとく手
に取れば、八幡が首引提げんは案のうち、敷妙の身に
は大切な夫婦の縁を継目の旗、ソレ大事に召され、浜
夕」

